



現代中国における農民出稼ぎ者の生活実態と意識変化 : 北京の農民出稼ぎ者の事例を中心に

江, 秋鳳

(Citation)

神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, 4(1):99-116

(Issue Date)

2010-09

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81002641>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81002641>



現代中国における農民出稼ぎ者の生活実態と意識変化 ——北京の農民出稼ぎ者の事例を中心に——

Study on the Changes in Life and Consciousness of Rural Migrants in China : The Case Study of Rural Migrants in Beijing

江 秋 鳳*

Jiang Qiufeng

要約：本稿では、北京市での農民出稼ぎ者の生活実態や意識に関する質的調査を行い、都市へ流入した農民出稼ぎ者たちがどのような問題を抱えているのか、どのような生活を送っているのか、都市での生活体験を通してどのような意識変化を起こしているのかなどの実態を明らかにし、その現実がもつ現代社会的意義を考察する。本稿の調査によれば、農民出稼ぎ者たちは、経済動機だけでなく、むしろ個人の生活と能力の発達を目指し、苦勞と引き換えに夢を持ちつつ、出稼ぎを行っている。都市での生活を経験する中で、意識も多様に変化しつつある。出稼ぎ者はより大きな希望を自分の子供に寄せ、自分自身に関する現実をリアルにふまえ、北京市に定住するよりも、帰郷を望んでいる。そこには近代的な自我の確立とともに、そうした規範の中で下層に押しとどめられている自己の生活の論理の複雑な絡み合いがみられる。

はじめに

1970年代末の経済体制改革をきっかけに、中国の農村では農地の減少や余剰労働力の発生等、深刻な問題が生じてきた。農村で余剰労働力となった人々は、様々な方法で非農業部門や都市への出稼ぎを始めた。こうして中国では、空前の規模で出稼ぎという社会現象が広がっていった。出稼ぎ者の移動は、都市－農村が厳密に区分された従来の中国社会の二元的構造を打ち破り、農民が工業化の利益と都市の文化を享受する新たな状況を生み出した。そこで今、農民出稼ぎ者の生活や社会意識の正確な把握が求められている。

国勢調査（表1）によれば、中国の総人口は、1978年時点で9億6千万人に達していた。そのうち7億9千万人は農村に居住しており、農村人口は中国の総人口の82%を占めていた。その後、「改革開放」政策により、中国は驚異的な経済成長を遂げてきた。そして1990年代半ば以降、急速に経済発展を遂げた都市部、とりわけ北京・上海・経済特区および東部沿海地区において労働力不足が顕著になった。一方、農村では、農業生産技術の急速な進歩と農業器具の改良によって労働力の過剰化が進行した。こうして、農村から都市への巨大な人口移動として、農民出稼ぎという社会現象が必然的に生じてきた。とりわけ1980年代半ば以降、農民出稼ぎ者

が都市部へ多く流入し始めた。中国では、この農民出稼ぎ現象を「民工潮¹⁾」と呼んでいる。中国国務院『中国農民出稼ぎ労働者調査研究報告』によれば、2007年には、都市への農民出稼ぎ者は約1億5千万人に達しているとされる。

こうした大量の農民出稼ぎ者は、現代中国の社会・経済の動向にとって無視できない存在になっている。例えば北京市では、2008年時点で農民出稼ぎ者の流入人口が510万人を超え、同市の総人口1,700万人の3分の1を占めた。また2008年には北京オリンピックが開催されたため、地方からの建設労働者の流入はさらに加速した。もちろん、北京市における農民出稼ぎ者の仕事は建設労働のみに限らず、製造業労働者、自動車等の修理工、マンションやビルのガードマン、清掃係、住み込みの家政婦、商店や新聞スタンドの販売員、レストランのウェイターやウェイトレス、自転車による宅配人、野菜売りなどにも広がっている。このような都市生活には欠かせない仕事を、主に農民出稼ぎ者が引き受けているのである。

1. 先行研究

現代中国の農民出稼ぎについては、日中双方に多くの研究蓄積がある。例えば、大島(1996)、南・牧野(1999)、鐘(2000)、温・悠(2001)、

* 神戸大学大学院人間発達環境学研究科博士後期課程

(2010年3月31日 受付)
(2010年7月15日 受理)

表1 中国の総人口および都市・農村別構成（単位：万人）

年	総人口	都市		農村	
		人口	比率 (%)	人口	比率 (%)
1978	96,259	17,245	17.92	79,014	82.08
1980	98,705	19,140	19.39	79,565	80.61
1985	105,851	25,094	23.71	80,757	76.29
1989	112,704	29,540	26.21	83,164	73.79
1990	114,333	30,195	26.41	84,138	73.59
1991	115,823	31,203	26.94	84,620	73.06
1992	117,171	32,175	27.46	84,996	72.54
1993	118,517	33,173	27.99	85,344	72.01
1994	119,850	34,169	28.51	85,681	71.49
1995	121,112	35,174	29.04	85,947	70.96
1996	122,389	37,304	30.48	85,085	69.52
1997	123,626	39,449	31.91	84,177	68.09
1998	124,761	41,608	33.35	83,153	66.65
1999	125,786	43,748	34.78	82,038	65.22
2000	126,743	45,906	36.22	80,837	63.78
2001	127,627	48,064	37.66	79,563	62.34
2002	128,453	50,212	39.09	78,241	60.91
2003	129,227	52,376	40.53	76,851	59.47
2004	129,988	54,283	41.76	75,705	58.24
2005	130,756	56,212	42.99	74,544	57.01

（『中国人口統計年鑑』（2005）より筆者作成）

石田（2002）、朱（2005）、楊（2007）などである。

それらによれば、一般に労働力の移動は経済発展によって引き起こされ、発展段階によって顕著な特徴があるとされるが（朱、2005：30）、中国の労働力流動も例外ではない。中国経済の発展段階毎に、農民出稼ぎ者は異なる特徴を示している。朱農は、これを4つの段階に区分している（同：30-1）。第1段階（1949年～58年）は、工業発展の開始期である。この時期、第2次世界大戦や内戦が終わり、国民経済が回復し、人々の生活も安定し、都市の発展が加速した。国家は、交通・運輸と製造業の発展を重視し、都市は労働力の受け入れ能力を高めた。そこで大規模な農民出稼ぎ者の移動が起こった。国家は、これを制限する政策を特にとらなかった。第2段階（1959年～77年）は、国家が農民出稼ぎ者の流動を厳しく抑制した期間である。工業化の調整と停滞²によって、都市人口を削減するために労働力の自由な流動が制限され、反都市化の現象が見られた。特に「文化大革命」期には、知識青年と国家幹部の「上山下郷³」が実施され、都市工業の発展は停滞した。第3段階（1978年～84年）は、農村経済改革が実施され、農民が農地から解放され、農業経営方法や職業選択の自由を得た時期である。農村の余剰労働力が、再び都市や農業以外の産業へと自発的に流動し始めた。土地公有制は維持されたが、郷鎮企業や村による多様な所有制が並存し、非農業部門における労働力の受け入れ能力が高まった。労働力移動を抑制する政策は次第に緩和され、多数の農民が都市への出稼ぎを開始した。第4段階（1985年以降）は、農村から都市への労働力流動を抑制する政策が徐々に撤廃されていく時期である。この時期には、戸籍制度は依然として存在しているものの農民は自由に都市

へ出稼ぎに向かい、都市に長く滞在することが可能となった。特に沿海地区の工業化と都市化の加速によって、中国国内の地域間格差が拡大し、大規模な農民出稼ぎ現象が発生した。

こうした大規模な農民出稼ぎ者の移動は、中国の経済と社会に様々な影響を与えた。同時にそれは、計画経済の時代から持ち越され、今なお市場経済の歩みを阻んでいる旧制度の問題点も顕在化させた（石、2003）。このような中国の複雑な労働力移動は、既存の理論モデルでは説明が難しい。例えば、発展途上国における労働力移動の分析においては、従来、多くの研究がルイス・モデルを応用してきた（Lewis、1969）。ルイス・モデルによれば、発展途上国の経済は、行動原理が異なる伝統部門と近代部門の二重構造をもつ。そして伝統部門から近代部門への労働力移動を基軸として、工業化が達成される。しかし中国の現実には、こうしたモデルの想定とは大きく異なっていた。改革開放以前の中国経済は、農村部門と都市部門の2部門から構成され、政府のマクロな経済政策によってコントロールされてきた。1980年以前は、人口移動を厳しく制約する戸籍制度や食糧分配制度が実施された。また「文化大革命」期には農村に大量の人口が還流させられ、農村に大量の過剰労働力が堆積してきた。こうした状況を背景として、1980年代には、都市への大規模な労働力移動という「返城」現象が発生した。しかし、そうした都市への労働力移動・流入もまた、戸籍制度（暫住証保持の義務づけ）や、計画生育政策（例えば、既婚女性が毎年定期的に出身地に帰って、身体検査を受けなければならない）など、政府の政策による影響を受けた。近年、暫住証保持義務など、人口移動を制約する制度は緩和しつつあるが、制約は依然として残存している。

また、労働力移動要因をめぐる研究においては、プル（pull）・プッシュ（push）理論も広く用いられてきた。この理論によると、流出地における自然資源の減少、農業生産コストの高騰、農業余剰労働力の発生、比較的低い経済収入などが労働力移動のプッシュ要因となり、それに加えて、流入地の比較的多くの就業機会、より高い収入、良好な生活レベル、多くの良好な教育機会、文化施設などが移動のプル要因となる（馮、2009）。1978年以降、経済改革と市場経済の導入により、中国の経済は著しく成長してきた。農村地域では、生産請負制の導入および人民公社の解体によって、生産性が大幅に上昇した。これにより、従来、人民公社内で潜在化していた農業余剰労働力が、土地への強制的拘束から解放された。それと同時に、都市部の発展はより急速に進み、労働力不足が顕著になった。ここまでは、プル・プッシュ理論が当てはまる。しかしながら、この理論は、市場化および労働力の自由移動が重要な前提となっている。中国では市場システムの導入が進んできたとはいえ、法律が未整備な部分がなお多く存在しており、完全な市場化の実現には至っていない。しかも独自の戸籍制度が存在するため、多くの出稼ぎ労働者は一時的に都市部に流入した後、故郷に戻ることを余儀なくされてきた（李、2003：132）。そこで農民出稼ぎ者は、都市部と故郷との間を振り子のように往復する。こういった現象は、中国に特有の現象に他ならない。そのため、プル・プッシュ理論をそのまま適用することはできない（馮、2009：106）。

さて、出稼ぎ者の増加に伴い、中国政府の政策・姿勢も大きな変化を見せてきた。馮文猛によると、2003年頃までは、政府は基本的に出稼ぎ労働者をコントロールする姿勢をとってきた。公表され

た多くの通達も、いかに出稼ぎ労働者の移動を政府の管理下に置くかを旨としたものであった。しかしその後、政府は出稼ぎ労働者に対する管理を緩和し、彼らの就業、子女教育、権益保護に対する関心を高めてきた。具体的には、新条例の策定と実態調査といった2つの措置をとってきたのである。2003年頃から出稼ぎ労働者に関する通達が一気に増え、2005年までのわずか3年間に20以上の条例や通知が公表された。こうした傾向のピークとして現れたのが、2006年3月の「農民工問題の解決に関する若干の意見」の公表である。また、それらの条例の策定に加えて、国家统计局は全国規模で実施した29,425人の実態調査に基づき、2006年10月に「都市部出稼ぎ労働者生活の質に関する調査報告」を公表した（馮、2009：104）。ただ、この調査結果からは出稼ぎ労働者の生活を概観することはできるが、そのほとんどは単一変数に対する叙述的な集計にとどまり、出稼ぎ労働者の生活実態が十分に解析されているとは言えない。

また若林敬子も、人口センサスおよび現地でのインタビュー調査に基づいて、戸籍制度を中心とした制度改革と移動人口の変化について分析を行ってきた（若林、2005：237-322）。そこでは、現代中国の現実的な人口問題の一つとして、農村余剰労働力および流動人口の問題があげられている。また、農村から都市への大量の労働力移動は農村の余剰労働力問題を緩和させるとともに、都市の経済開発にも大きく寄与しているが、都市の交通、住宅、および治安に関する様々な社会問題も引き起こしていると分析されている。このような分析は適切であろうが、それにとどまらず、農民出稼ぎ者たちがどのような問題を抱えているのか、都市へ流入した彼らがどのような生活を送っているのか、農村と都市の「二元社会」の生活体験を通して、彼らの意識にどのような変化が見られるのかといった問題を分析することも、重要であろう。

そうした出稼ぎ労働者の意識と生活実態について論じている研究としては、熊谷苑子の調査研究を挙げることができる。熊谷は、江蘇州太倉市で211人の女性出稼ぎ者に対するアンケート調査を行い、その調査に基づいて、「戸籍上の移動は極めて難しい」、「彼女たちは急成長する都市や先進地域社会で“3K”労働を担う重宝な限界労働力としてマージナルな位置を占める」、「同時にその社会から差別、疎外され、孤独、不安などの感情を抱いている」、「公的セクターの支援が欠如し、彼女らの人間関係は狭い血縁や地縁のネットワークに依存している」等の問題を明らかにした（熊谷、2002：150）。ただし、この調査の対象はあくまで女性の農民出稼ぎ者に限られている。農民出稼ぎ者の大部分を占める男性も含め、農民出稼ぎ者の総体的特徴の把握を行うことは、依然として大きな課題として残されている。また、熊谷の調査は1997年と98年に行われ、その対象は内陸農村から沿海農村へ移動してきた農民出稼ぎ者である。しかし、2001年以後、新しい戸籍制度に向けた改革⁴が全国の一部の省と市（例えば、江蘇、浙江、四川、河南、河北など）で推進され、自由な移動と居住地の選択を可能にした。この時期から農民出稼ぎ者の移動の特徴は「農村から農村へ」から「農村から都市へ」に変化した。その点からも、この調査結果に基づいて、現在の農民出稼ぎ者の実態を推し量ることは難しい。

さらに馮文猛（2009）は多くの先行研究の比較作業を行い、現在の中国の政策動向を押さえた上で、北京・上海・広州の農民出稼ぎ

者本人の調査と、四川の留守家族の調査を行い、農民出稼ぎ者の生活実態や留守家族・村落への影響、子弟教育などを多角的に分析している。その中で彼は、出稼ぎの移動行為が第一義的には、流入地と流出地の収入格差に基づくことを示している。また馮は、人的資本・経済資本・制度資本・流入地適応・家族形態の5つの影響要因を取り上げ、序数回帰分析を通じて農民出稼ぎ者の都市定住意識も分析している。そこでは、高い教育レベルを持ち、滞在期間が長く、「夫婦と子供」で出稼ぎにきている人ほど、より強い定住意識を示すこと、収入ではなく職種が定住意識に影響を及ぼしていること、そして農業戸籍所有者の定住意識は低いことなどが明らかにされている。これはもとより貴重な研究ではあるが、ただしこうした定住意識をより深く解明するためには、詳細な質的事例研究が不可欠であろう。また定住意識だけではなく、それ以外の分野に関する意識の変容も、残された解明課題である。

以上、先行研究をふまえれば、都市に流入した農民出稼ぎ者がどのような問題を抱えているのか、どのような生活を送っているのか、そして都市での生活体験を通してどのように意識を変化させているのかといった実態の把握は、決して十分になされているわけではない。そして、それらをより深く解明するには、統計的研究のみならず、詳細な質的事例研究が不可欠である。本稿は、こうした課題にアプローチしたい。

なお本稿では、北京市の農民出稼ぎ者の実態を事例としてとりあげる。北京市は先行研究が少ない上、他の都市より戸籍制度が厳しく、戸籍制度に縛られた農民出稼ぎ者の意識を把握するという点で、調査地として適している。

本稿の素材とした調査は2007年9月に北京市内で実施した。調査対象となった農民出稼ぎ者は男性34人、女性17人、計51人である。対象者の確保に際しては、調査の性質上、対象者との信頼関係の構築が不可欠であることから機縁法を用いた。またいくつかのケースに関しては参与観察も実施した。

2. 調査結果

2-1. 基本属性

まず、対象者の基本的な属性は、表2の通りである。以下、各項目のインタビュー内容を交えて説明しよう。

【出身地】

出身地は山東省が最も多く、河北省がそれに次ぐ。いずれも北京から比較的近い省の農村出身者である。空間的距離や交通の便が、出稼ぎ先を選択する重要な条件になっていると推測されるが、それだけではなく、出稼ぎ者に対して、出身地による信用度の差が生じるケースがあるという。そのため出稼ぎ者は、自分の本当の出身地を隠して、人気のある出身地を偽称することもある。

* 【S6氏・男・74年生・山東省出身】山東省出身者が北京では一番人気がある。河北省人はよく山東省の人のふりをしていて。山東省人は北京で多く、何かあったら互いに手伝い合う。

【S11氏・男・77年生・山東省出身】山東省は北京に近い。都市で運転手を募集する会社が一番募集したいのは現地の人で、次いで出身地が都市に近い人だ。都市から遠い出身地の

人は北京の地理がよく分かっていないから会社も安心できないし、運転手の仕事を見つけない。

【学歴】

最終学歴は中学校が多いが、高校や専門学校の卒業者も見られる。総じて彼・彼女らは非識字・不就学ではなく、一定の知識・学歴を持っていると言える。ただ、特に26歳以下の世代では中学までの学歴が多く、中には中学を卒業しないまま出稼ぎを始めた者もいる⁵。また故郷の農村では、親が経済的な理由で子どもに学業を断念させたり、あるいは娘は退学させて息子を進学させるという慣習も存在している。こういったことは、後で見るような、子供の教育問題への関心の高さにも影響を及ぼしていると思われる。

＊【S 20 氏・男・83 年生・中学校】学校の成績は悪かった。ちょうど、親戚が北京で働いている会社が、故郷で大量募集をした。それで中学2年生の時に退学した。その親戚の紹介で、出稼ぎにきた。

【S 46 氏・女・85 年生・中学校】私は中学卒だ。兄が1歳上で、私と同じクラスだった。成績は良かったが、2人分の進学費を両親は負担できないので、仕方なく、私は高校へ行かず、チャンスを兄に譲った。もし当時、政府が12年制の義務教育を実施していたらよかったのにと、今もその夢をよく見る。

【S 2 氏・男・66 年生・小学校】20 年前、僕が20 歳前の頃、農村はとても貧しかった。兄弟も多く、農業も大変だ。それに僕は長子だから、小学校3 年生で退学した。「男女のトイレが区別できれば十分だ」と両親は言っていた。

【S 39 氏・女・79 年生・小学校】私は弟と双子だが、2 人一緒に学校へ入りにくかったので、私は退学して、弟だけ学校に入った。今、弟は大学生で、私の貯金はほとんど弟にあげている。弟のために退学したので、少し残念な気持ちがある。

【婚姻状況】

次に婚姻状況をみよう。26 歳以上の男性は既婚で子供がいる場合が多く、逆に26 歳以下の世代では男女ともに、未婚者で子供がいない場合が多数を占めている。聞き取り内容からは、農村的慣習に基づく早婚、農民出稼ぎ者であるがゆえの結婚上の不利など、各々の事情が見えてくる。

＊【S 1 氏・男・63 年生・既婚・子供あり】僕は、小学校5 年生で13 歳の時に、もう婚約した。その時はまだ、「妻」という名前の意味も全然分かっていなかった。農村で、特に僕の両親は「早く結婚すれば早く孫ができる」と思っていたので、中学校を卒業するとすぐ結婚した。

【S 26 氏・男・85 年生・未婚】今、結婚相手を見つけない。好きな女の子がいるけど、その子は僕のことを気に入っていない。ちょっと条件がいい女の子になると、もっといい男と結婚したがる。僕は故郷へ帰ると、ほとんど毎日お見合いに行く。疲れるよ。今、帰省と言うと緊張する（笑）。

表2 調査対象の基本属性

性別		男性		女性		合計
年齢		26歳～	16～25歳	26歳～	18～25歳	
人数		15	19	5	12	51
学歴	小学校	3		1		4
	中学校	4	14	3	6	27
	高校	2	4	1	4	11
	専門学校	5	1		1	7
	大学	1			1	2
婚姻状況	既婚・子有	13	3	4		20
	既婚・子無	2	1			3
	未婚		15	1	12	28
家族との同居状況	①	6	1	2		9
	②	4	2			6
	③	2		2		4
	④	1	1			2
	⑤	1				1
	⑥	1				1
出身地	山東省	9	4	2	2	17
	河北省	2	6		4	12
	四川省	2		2	2	6
	河南省		3		1	4
	山西省		2		1	3
	黒竜江省		3		1	4
	その他	2	1	1	1	5
家族人数	3人	4	5		2	11
	4～6人	7	14	2	10	33
	6人以上	4		3		7
一人当耕地面積	1畝以下	3		2	1	6
	1～2畝	10	14	3	11	38
	2畝以上		4			4
	無回答	2	1			3

補注) 家族との同居状況 ①配偶者・子供同居、②配偶者・子供留守、③配偶者同居・子供留守、④配偶者同居・子供無、⑤配偶者他出稼ぎ先・子供無、⑥配偶者他出稼ぎ先・子供留守
資料) 実態調査より作成

【子供との同居／別居状況】

子供との関係をたずねると、同居／別居、心配の有無にかかわらず、子供の存在およびその教育が出稼ぎ者の意識に占める位置が極めて大きいことが伺える。ただし、同居する場合は北京での高額な学費が大きな懸念になっていることも分かる。

＊【S 1 氏・男・63 年生・別居】去年、妻が故郷に戻った。息子がよく殴り合いのけんかをして、何回も学校で処分された。このままいくと、息子が健全に成長していかない。だから、夫婦のうち1 人が出稼ぎをやめて、故郷に戻ることに決めた。僕の方が収入が高いし、仕事歴も長いし、男だから単身赴任でも妻よりは安心だ。

【S 2 氏・男・66 年生・別居】子供は2 人いて、上の娘がもう13 歳、小学校6 年生で、下の息子が7 歳、小学校1 年生。2 人ともいい子だ。勉強もまじめだし。特に、娘は他の子より物分かりがいい。弟の世話を見るし、祖父母の農業も手伝っている。この子たちのために必死に努力する。

【S 5 氏・男・71 年生・別居】子供は農村で両親と一緒に生活している。もう小学校6 年生だから自立できる。一番心配なのは勉強だが、成績があまり良くない。僕と妻が北京で一

生懸命働く目的は1つしかなくて、それは子供の将来のためだ。出稼ぎに来ると、親の目が届かないから子供の成績が良くなりにくい、出稼ぎに来ないでお金を稼ぐのはもっと難しい。子供を連れてきて北京の学校に入れたいけれど、入学金を1万8千円ぐらい出さないと入れないので……困ったなあ。

【S 7氏・男・75年生・同居】将来、北京の学校へ入れるか、故郷へ戻るか迷っている。北京の学費は高い。今、娘はもう幼稚園の年齢だが、幼稚園の費用は安くても500円かかるので、ずっと行かせなかった。けれど、小学校の時はどうしようかと悩んでいる。

【S 38氏・女・78年生・同居】同居している娘が3歳で、北京の幼稚園に入っている。月に500円、月謝がかかる。小学校に入る時には2万円ぐらい入学金があるそうだが、その時の経済状況によって、北京にいるか故郷へ帰るか決める。

【家族の人数】

周知のように、中国では一人っ子政策が実施されている。しかし、農村では1人目に女の子が生まれると、違反を覚悟の上で2人目の子供を産むことが多い。そのため4～6人家族が多くなっている。聞き取りからも、そうした実態が伺える。農村では男尊女卑の意識がまだ残存していることの表れでもあろう。北京へ出稼ぎに出て都市的な価値観に触れても、その意識は容易に変わらないと言えよう。

*【S 4氏・男・71年生・3人家族】男女平等とはいえ、最初の子供が男の子だったら、2人目の子供を産まない家族が多い。けれど、最初の子が女の子だったら、ほとんど2人目の子を産む。もし、2人目の子もまた女の子だったら、流産したり、出産してから八方手を尽くして3人目の子を産む。

【S 5氏・男・71年生・7人家族】僕の家族は何代にもわたって男子1人だけの家系だ。僕は4人きょうだいで、姉2人、妹1人。僕には娘が2人いるけれど、計画生育政策によって、僕たちはもう子供を産むことができない。けれど、男の子がいないので両親が許してくれないし、僕も、男の子が欲しい。だから去年、政府に隠れて、3人目の子を産んだ。今度は男の子だったが、ほっとすると同時に、悩みも出てきた。戸籍も取れないし、故郷へ連れて帰れないし、経済的負担もひどくなった。ただ、妻はよく後悔するけど、僕は後悔しない。

【S 42氏・女・84年生・4人家族】1人目の子が男の子でも、2人目の子を産む家族は多い。一人っ子の家族は農村ではほとんどない。

【所有耕地面積】

現代中国の農村では、都市化に伴って工場・道路への農地の転用が著しく、農地が急速に減少している⁶。また上記のように、農村では一人っ子政策に違反する家族が多く、戸籍を取れない子供が少なくないため、実際の1人当たりの耕地面積は減少している。調査対象者においても、1人あたり1～2畝の保有にとどまる層が最も多かった。これもまた、農村労働力が過剰化し、出稼ぎ流出を促進する要因の一つである。聞き取りからは、耕地の減少・農業の機械化にしたがって、村民たちが農業だけでなく、村の近くの工場で兼

業したり、自分も持っている技術を活用して農業以外の仕事をしていることがうかがえる。

*【S 4氏・男・71年生・0.8畝所有】以前は農地が多かった。平均で1人当たり2畝。農産物の収穫にも人力ばかり使っていた。今は、収穫機械もあるし、雑草防止の農業もあるし、トラクターもある。それに、農地が減った。住宅に使うか、郷に回収されるか、工場の建築に使うか、だ。それで今、1人当たり1畝ほどになった。冬になると農作業はないから、父と妻は近くの木材工場で臨時の仕事をしている。

【S 32氏・男・88年生・1.2畝所有】父は村の建築隊員になって、建築をするために、近くの村をまわっている。収入も少ない。1日60円ぐらい。冬の農閑期で雨の日以外はほとんど仕事できるので、月に1,500円稼ぐのも無理ではない。

2-2. 労働・生活実態と社会関係

調査対象者の過去の出稼ぎ経歴については、表3の通りである。以下、各項目のインタビュー内容を交えて説明していく。

(a) 過去の出稼ぎ経歴

【出稼ぎの動機・目的】

調査対象者の出稼ぎ動機を見ると、「自分の視野を広げる」および「新しい技術の習得」が最も多かった。後で見る表9の「出稼ぎを通じた人生観の変化」の項でも同様の結果が出ていることから、今回の調査以前の（複数回の）出稼ぎ時に、すでに意識の変化を経験している者も多いと思われる。また、「とにかく農村から出たかった」、「都会での生活を経験したかった」という動機も見られ、単に「稼ぐ」ためだけに都市へ出稼ぎに出ているわけではないことがうかがえる。なぜ農村から出たいのか、都会での生活を経験したいのかの理由も多様であり、聞き取り内容の中にそれらが表れている。

*【S 8氏・男・75年生】農村での生活水準は、昔よりはよくなった。でも、都市の市民はテレビを持っているけれど、農村では電気がまだ普及していない。都市の市民はバイクに乗っているけれど、農村には自動車用の道路もないし、家族全員に一台の自転車しかない。都市の市民がブランド物の衣服や今年の流行についてあれこれ議論している時、農村では母親の手作りの服と靴下を着続けている。一言でいえば、農村は永遠に都市より遅れ続けるということだ。

【S 5氏・男・71年生】農業収入だけでは、衣食を満たすことはできるけれど、子供の学費とか、現代的な生活用品とか農業器具の購入のための費用はない。だから出稼ぎに行く。

【S 37氏・女・77年生】都市の子供は3歳になると幼稚園に入るけれど、農村では幼稚園があることは珍しい。8歳になるまで、子供は毎日、河や林や山で遊んでばかり。彼らは音楽、映画、踊り、英語とかを全然知らない。

【S 35氏・女・71年生】小学校から高校までの教育水準も比べものにならない。農村の子は大学に入るために毎日勉強してばかりで、娯楽とかは思いもよらない。しかも、都市の子は450点で有名な大学に入れるが、農村の子は700点以上取らないと入れない。500点以下だと専門学校にも入りにくい。だから毎日勉強しなければならない。

【S 17氏・男・80年生】僕は高校の学費が払えず、入学試験

に合格しても高校に入れなかった。しょうがないから何年間も農業に従事した。過去、僕より成績が悪い同級生が次々に大学や専門学校に行って、僕は納得がいかない。学歴は低くても自分の人生を変えたい。

【S 22 氏・男・84 年生】僕は大学の入学試験に落ちたから、農村ではつまらないし、前途も見えない。大学に入らなくても、北京へ行って他の道を探して、大学生に負けないと証明したい。しかも、農民の生活はとても苦しい。農産物の価格も低すぎるし、収入も低い。農民としての現状から抜け出したい。

【S 36 氏・女・73 年生】農村の生活はとてもしんどいと感じ、自分の運命を変えたくて、外へ行ってみようと思った。

【S 11 氏・男・77 年生】農業は特に季節性が強くて、夏・秋は死ぬほど忙しく、冬になるとすごく暇なので、農村で何もしていないでぶらぶらしているより、外へ仕事に行ってお金を儲けたほうがいい。たとえ少しでも構わない。

【S 1 氏・男・63 年生】農村の人間は、都市の市民より素朴と言えるけれど、実は農村での差別は激しい。貧乏なら兄弟姉妹にも見下される。それに農産物の生産量は過去より多くなったけど、価格が安すぎるし、売れないし、収入はやはり少ない。だから出稼ぎに行く。

【出稼ぎ先と業種】

出稼ぎ先の地域・業種をたずねると、全員が、過去にも北京に来た経験があった。これは最初に見たように、各々の出身地とも関係があるだろう。対象者によっては、出稼ぎに複数回出た経験のうち、すべてが北京でのそれだったケースもあった。また業種に関しては、サービス業⁷に従事した経験をもつ出稼ぎ者が最も多かった。

＊【S 45 氏・女・85 年生・ホールスタッフ】サービス業はレベルが低い仕事が多く、技術も必要なく、未経験者も歓迎なので、初めて出稼ぎに来た農民にとっては一番つきやすい。

【雇用形態】

雇用形態は、臨時雇の経験者が多い。対象者の多くは、短期間に何度か仕事を変えた経験をもっている。出稼ぎ者たちが頻繁に雇用、解雇、再雇用を繰り返している状況がうかがい知れる。ただ、そこに見られる出稼ぎ者の意識は様々で、次の【雇用期間】にも見られるように、臨時雇を敬遠するだけとは一概には言えない。

＊【S 34 氏・男・90 年生・通信工事業（臨時）】臨時雇は嫌だ。いつでも解雇される可能性があるから次の仕事に困る。契約期限があらかじめはっきり決められた契約雇だったら契約期間が分かるから、期限が近づく前にいろいろ準備できる。

【S 28 氏・男・85 年生・商品運搬業（臨時）】どんな仕事でも同じだ。今の仕事をやめても、いい仕事は見つからない。しかもすぐ仕事を見つけないければ、金や時間が無駄になる。

【S 13 氏・男・78 年生・不動産仲介業】ほとんど臨時雇だった。忙しい時期に人員を数多く募集して、暇な時期には解雇する会社がよくある。僕は臨時の方がいいと思う。農繁期や、留守家族に急用がある時に帰省できるから。

表 3 過去の出稼ぎ経歴

性別		男性		女性		合計
年齢		26歳～	16～25歳	26歳～	18～25歳	
人数		15	19	5	12	51
出稼ぎ動機 (複数回答)	①	6	1	2		9
	②	7	4	2	2	15
	③					0
	④	3	5	1	1	10
	⑤	2	1			3
	⑥	1	1		1	3
	⑦	6	12	3	10	31
	⑧	9	9	5	8	31
	⑨	3	5	1	1	10
	⑩	2	6	1	2	11
過去出稼先	A	15	19	5	12	51
	B	2				2
	C	1	2		1	4
	D	1	2			3
	E	2	3		2	7
過去業種	製造業	2	1	1	4	8
	建築業	4	7			11
	サービス業	9	13	4	11	37
	交通運輸業	6	4			10
過去雇	臨時	13	18	2	6	39
	契約	5	6	3	9	23
	自営業	3	1			4
雇用期間	1 年以内	6	15		9	30
	2～3 年間	2	4	2	4	12
	3 年以上	13	6	3	2	24
仕事の 手づる	a	15	18	5	11	49
	b	1	1		2	4
	c	3	2		1	6
	d		2			2
	e	2			1	3
	f		1			
	g		1			
賃金	毎月	13	17	5	12	47
	不定	2	2			4
不払	有	4	1			5
	無	11	18	5	12	46

補注：出稼ぎ動機：①子供の教育費、②家の購入・建築費、③家族の医療費、④起業資金、⑤農業資金、⑥それ以外の資金、⑦視野の拡大、⑧新技術習得、⑨農村脱出、⑩都市生活経験
過去出稼先：A・北京、B・東部沿海都市、C・上海・広州など大都市、D・大連など東北地方、E・出身地の地方都市
仕事の手づる：a・親せきや友人、b・職業斡旋業者、c・出身地での募集、d・労働市場センター、e・人材市場センター、f・出稼ぎ先募集広告、g・インターネット
資料：実態調査より作成。

【雇用期間】

雇用期間は、男女問わず若い世代の場合、短期間であることが多い。それは、【雇用形態】でも見たように、雇用者側の都合もあるだろうが、出稼ぎ者の側にも、収入や職場環境を考慮して、自分にとって都合の良い出稼ぎ先に移っていこうという意識が見られることも影響している。長期契約を望むとしても、条件付（自分の希望に見合った職場）ということだろう。

＊【S 27 氏・男・85 年生・最短 8 カ月／最長 1 年 6 ヶ月】少しでも高い収入の仕事があれば、または知人の紹介があれば、

現在の仕事を簡単に辞めて新しい仕事へと赴いてきた。

【S 19 氏・男・83 年生・最短 2 カ月／最長 4 年 1 ヶ月】初めは上海の木材工場へ行った。外から見ればその工場は明るく広い、立派で寮もよく、夫婦の部屋もあったが、その労働者は皆、足にも腕にも背中にも瘡ができていた。流れ作業中に「固化水」という液体が跳ねて皮膚にかかるとすごくかゆくなる。かくとただれてしまった。すごく怖くて、1 ヶ月後、我慢できなくなった。その時ちょうど、近くの繊維加工工場が募集していた。給料は木材工場より安かったが、仕事を変わらなかつた。けれど、その工場も粉塵まみれで汚く暗く、仕事も忙しくて、寒さも暖かさも気がつかなかった。でも、やはり上海だから、仕事が苦しくても同僚たちは恨み言も言わなかつた。2 年後、北京で働いている親戚に通信工事の仕事を紹介してもらったから、その工場の仕事をやめて北京へ来た。以前の仕事と比べると今の仕事が一番いいと思う。

【仕事の手づる】

出稼ぎの仕事の手づるは、先に出稼ぎをしていた親戚や友人の紹介であることが圧倒的に多い。職業斡旋業者や労働市場センター、人材市場センターを利用したケースは少数にとどまる。農民出稼ぎ者が都市へ出稼ぎに出て仕事を見つける際、私的ネットワークが大きな役割を果たしていることが分かる。労働市場センターや人材市場センターが整備され始めたのは 2000 年以降であり、その認知度が少しずつ高まってきていることはインタビューからもうかがえたが、依然として私的な人間関係が手づるの主流であると言えよう⁸。

* 【S 39 氏・女・79 年生・親戚からの紹介】親戚や友人は自分が働いている工場を紹介してくれたり、同じ業種の近くの工場を紹介してくれたりする。

【S 51 氏・女・87 年生・親戚からの紹介】労働市場センターはお金がかかるよ。それより親戚の方が信用できると思う。

【S 18 氏・男・81 年生・友人からの紹介】兄が出稼ぎに出始めた頃は、労働市場センターなど聞いたこともなかった。当時、労働市場センターがあったかどうか、僕も知らない。

【S 16 氏・男・80 年生・親戚からの紹介】職業紹介所という名目の、民間の「地下職業紹介所」が多い。一般的にいて信用できない。その紹介所に入るといろんな費用がかかるし、仕事につく前に紹介費を払わないといけない。払ってもいい仕事を紹介してもらえる可能性は少ない。

【S 50 氏・女・87 年生・職業斡旋業者からの紹介】労働市場センターも人材市場センターも、政府が仕事を探す人のために設置したものだ。今では多くの人がその役割を知っている。これからは、それらを使って仕事を探す人も増えると思う。

【賃金の支給形態と不払い経験】

出稼ぎ者が最も心配している事態は、賃金の不払いである⁹。ごく少数ではあるが、実際に賃金の不払いを経験した対象者もいた。強いといえば、年長の男性出稼ぎ者に不払い経験が多い。年長の出稼ぎ者は出稼ぎ活動の開始時期が相対的に早く、出稼ぎに関する彼ら自身の知識不足もさることながら、出稼ぎ者を保護する制度や政

策も整っていなかった。当時の出稼ぎ者の受け入れ先は主に個人経営の工場が多く、インタビュー内容に見られるように、「騙しやすい農民出稼ぎ者に、給料など支払わなくてもしょうがない」という風潮すらあった。また不払いが発生したケースは、「工事が終了したら給料を一括で払う」、「年末に清算する」、「会社の資金のやりくりがついた時に払う」といった、不定期の支払い方式だった¹⁰。現在、農民出稼ぎ者の雇用市場は改善されていると言えるが、大量の無登録・非合法の工場の存在、賃金の不定期な支払い、臨時雇用という雇用形態、労働内容・条件に関する契約のずさんさなどは依然としてみられ、賃金の不払いが根絶されたとは言えない。

* 【S 1 氏・男・63 年生】ある住宅建築工場で働いたが、工事を請け負った開発業者から直接給料が支払われるわけではなかった。給料は、現場の親方を通して支払われるという口約束で、しかも月額 100 元だけで、残額は工事終了後に一括して支払うという話だった。ところが、工事終了間際、親方は労働者の給料を持って逃げ、給料は支払われなかった。

【S 2 氏・男・66 年生】家具製造工場で働いたが、会社が破産したため、3 ヶ月分の給料が不払いとなった。騙しやすい農民出稼ぎ者に、給料など支払わなくてもしょうがない。

【S 5 氏・男・71 年生】木材加工工場で働いて、春節（旧正月）の休みの際、雇い主から「来年も継続してここで働けば、最後の 2 ヶ月分の給料を払う」と言われた。けれど春節に帰省して、親戚の紹介で別の会社で働くことになった。そのため、前の会社の 2 ヶ月分の給料が支払われなかった。

【S 16 氏・男・80 年生】木材加工の会社を辞めた時、会社側から「今は会社にお金がないから、後で払う」と言われ、給料を全額受け取れなかった。その後、何度も支払いを要求したが、「お金はない、責任者はいない」と拒否された。1 元ももらえないばかりか、交渉のための交通費も自己負担だ。「仕方ない」と給料の受け取りを諦めた。

(b) 調査時点の労働状況

調査時点の労働状況については、表 4・5 の通りである。以下、各項目のインタビュー内容を交えて説明していく。

【業種】

まず業種をみると、対象者の過半数以上がサービス業に従事している。1980 年代以降、中国では第 3 次産業が急速に発展しつつあるが、前述のように、サービス業には特に技術が必要としない仕事が多く、未経験者でも歓迎されるので、出稼ぎ農民にとっては就きやすい業種のようなのだ。さらに、聞き取りによると、ほとんどの対象者が、初めて就いた業種と同じ業種に就き続けている。何か技術を持っていなければ仕事は容易に見つかりにくい以上、どうしても最初に就いた業種にその後の職歴は影響されるようである。

* 【S 47 氏・女・85 年生・スーパー店員】仕事を見つけるのは簡単じゃない。人から仕事を紹介してもら場合、同業者の友人や親戚が多いから、仕事を変えても職種は変わりにくい。

【S 44 氏・女・85 年生・ホールスタッフ】何の仕事でも経験が大事だ。経験がないと、仕事を見つけるのは難しい。

【S 38 氏・女・78 年生・西洋料理店】経験があつたら、未経験より給料が高い。だから仕事の場合は変わっても、仕事の

内容は変わらない。この仕事に慣れたから、他の新しい仕事をする自信はない。

【1日の就業時間／昼休み時間】

就業時間はほとんどの者が8～9時間であるが、中には13～14時間の長時間労働をしている者もいた¹⁾。また、表向きは標準的な労働時間数でも、実際には多くのサービス残業をこなしている者もいる。一方で昼休みに関しては、2時間以上の長い休みをもらっている者も多いが、まったく休みがない者もいた。

＊【S 41氏・女・83年生・レジ打ち・8時間勤務／休憩なし】

1日8時間働き、朝8時から夕方4時まで、または夕方4時から夜12時までの交替制だ。ただし食事の時間を15分取れるだけで昼休みは全然ない。

【S 3氏・男・71年生・塗装・8時間勤務／2.5時間休憩】

工場には食堂がないから、昼ご飯は同じ寮の人で交替で自炊している。ちょうど7人いるから、1週間のうち1日は1人でご飯を作る。朝7時から仕事なので、それまでに朝ご飯を済ませないといけな。い。昼休みの時、当番はご飯を作ったり洗い物をしたりしてほとんど休めない。仕事は忙しくて、工期の期限までに終わらないと給料が引かれるから、一生懸命やらないといけな。い。

【S 11氏・男・77年生・運転手・9時間勤務／1時間休憩】

勤務時間は9時間だが、サービス残業が多くて、平均すると毎日10時間以上働いている。忙しい時は、18時間以上の連続勤務も少なくない。疲れた状態で運転するのは危なくて、妻がすごく心配している。

【休日】

1週間の休日は大半の者が1日だが、冬休みの日数では大きく長短の2群に分かれる。日数が短くて旧正月に故郷に帰れない者の中には、「どうしようもない」という顔をして涙を溜める者もいた。サービス業では休日が短い場合が多い。

＊【S 43氏・女・84年生・レジ打ち・冬休み3日】家は北京から遠いから、旧正月は帰れない。何人かと一緒に新年を迎える。寂しいけれど、北京は爆竹が禁止されているから、その音を聞かないだけちょっとましだ。

【S 40氏・女・83年生・ホームページ制作・冬休み5～6日】

往復に2日間かかるから、実は家族と一緒にいられる時間は3日間しかない。

【S 33氏・男・88年生・自動車修理・冬休み7日】(旧暦)

12月31日に家に着いて、新年当日は家族や近隣と一緒にすごし、2日は親戚のお宅へ行かないといけな。い。3日にはもう出稼ぎの準備。5日朝、北京へ戻らないと、会社に首にされる。

【S 18氏・男・81年生・家具製造・冬休み20日】

年初は会社に来る注文が少ない。大体、正月の下旬から注文が多くなる。注文が少ないと仕事も少ない。だから僕たちの休みも多くもらえる。家の遠い人は18～20日、近い人は15～18日ぐらい。

表4 現在の仕事状況－1

	職業	製造	建築	サービス	交通運輸	合計
	人数	4	8	29	10	51
男性	26歳以上	1	3	5	6	15
	16～25歳	1	5	9	4	19
女性	26歳以上	1		4		5
	18～25歳	1		11		12
1日の就業時間	8時間	4	3	15	2	24
	9時間			8	6	14
	10時間		5	2		7
	11時間			1	1	2
	13時間			1		1
	14時間			2	1	3
昼休み時間数	0			9	2	11
	1時間		3	7	5	15
	1.5時間			1		1
	2時間	2	5	5	3	15
	2.5時間	2				2
	3時間			6		6
	自由			1		1
休日数 1週間の	0		3		1	4
	1日	3	4	25	7	39
	2日	1		3	1	5
	不定		1	1	1	3
冬休み日数	無			5	1	6
	5～9日			15	1	16
	10～20日	4	5	6	7	22
	20日～		2	1		3
	不定		1	2	1	4
保険加入	加入	4	2	8	4	18
	未加入		6	21	6	33
仕事悩み (複数)	仕事難しい	1	1	6		8
	労働量多い	1	2	4		7
	決まり多すぎ			5	5	10
	労働時間長い		1	8		9
	仕事がつつい		3	8	2	13
	仕事が単純		2	9	1	12
	事前契約違う	1		3	1	5
	健康に悪い		2		1	3
	賃金少ない		1	12	1	14
	給料不払い			1	1	2
	休み少ない		1	7	1	9
	仕事が危険		3		1	4
	夜勤が多い		2	1	2	5
	サービス残業			11	4	15
	仕事少ない、雇用不安定	1				1
	北京出身労働者と関係悪い			2		2

資料：実態調査より作成。

【保険加入】

保険は、未加入者が半数以上を占める。リスク管理意識が低いというよりは、リスク管理手段の中に保険という選択肢が入っていない、という口ぶりである。

＊【S 7氏・男・75年生・運転手】保険には入らなくてもいい。自分で注意したら大丈夫だ。

【S 6氏・男・84年生・運転手兼塗装業】保険に入るかどうか会社に聞かれたことがあるが、保険料は給料から差し引かれるから、考えてやはり入らないことに決めた。

【S 5氏・男・71年生・自動車修理業】保険なんか入っても

入らなくても何の違いがあるの。事故に遭ったら自分が不運だったということだ。

【仕事の中で困っていること】

ここまで見てきた聞き取り内容にも表れていたが、仕事の中で困っていることとしては、「サービス残業が多い」「賃金が少ない」「仕事がつつい」「仕事がつまらない」などが挙げられる。逆に、「雇用の安定度」などにはそれほど不満が見られない。

【月収と満足度】

月収については、出稼ぎを始めた当初は、経験もないため賃金が低く抑えられるが、経験を積みは将来的に上がるだろうという希望をもっているようで、総じて肯定的に評価していた。ただ、出稼ぎを始めてからの期間、勤める会社の規模、子供にかかる費用、生活のレベルなどの多様な要因によって、金額の多寡と満足度は必ずしも一致しているわけではない。

＊【S 49 氏・女・86 年生・600 円】出稼ぎを始めたばかりなので給料が少ないが、経験さえ積めば給料も上がるだろう。

【S 26 氏・男・85 年生・800 円】やや少ないが 800 円の収入がある。これは農村での農業収入よりずっと多い。

【S 14 氏・男・78 年生・2,400 円】出稼ぎを始めて 10 年になるが、今は月収 2,400 円になり、新卒の大学生の給料と同じぐらいで、とても満足している。

【S 38 氏・女・78 年生・本人 800 円／夫 2,400 円】子供はまだ小さいけれど、大きくなったらもっとお金がかかる。今の収入で足りるかどうか心配している。無理なら故郷へ子供を送り帰して、両親に面倒を見てもらう。もしくは、私が出稼ぎをやめて故郷へ帰る。主人の給料の方が私より高いから、私がやめるしかない。

【S 36 氏・女・73 年生・本人 950 円／夫 6,000 円】会社の規模によって給料が違う。ずっと北京で自分の部屋を買いたいと思っていたけれど、子供の面倒をみるため、3 年間ぐらい仕事ができなかった。子供が病気になった時の保険料などは全部貯金から出していたから、貯金はあまり残っていない。北京の部屋の値段はすごく高くなっているの、ローンで買うにしても、最初に 15 万円ないとローンも組めない。主人の収入は少ないとは言えないが、多いとも言えない。

【留守家族への送金額、および貯金額と用途】

こうした収入の中から、大半の出稼ぎ者が送金を行っており、これは実家である農家にとって主な収入源となっている。また貯金も、月に 200 元以上しているケースが多かった。ただし、貯金額に関しては年長者の方が若干多く、年少者は相対的に月収が低いこともあってか、貯金にまでは多くの金額を回せないようだ。貯金の用途・目的としては、家の新築・リフォームのためという答えが最も多かった。また子供をもつ者が多い年長者は、学費にあてる場合が多いという特徴がある。それらに含まれるより詳しい事情は以下の聞き取り内容に表れているが、例えば S 9 氏は月収 900 円を得ているが、故郷の妻子に毎月 400 円を送金している。これは主に子供の学費であり、それ以外に毎月 300 円を貯金している。年末の帰省時には、

表5 現在の仕事状況－2

	性別	男性		女性		合計
		26歳～	18～25歳	26歳～	18～25歳	
	人数	15	19	5	12	51
月収（ボーナス含む）	1000元未満	4	12	2	6	24
	1000元～	5	5	1	5	16
	1500元～	1	1	2	1	5
	2000元～	5	1			6
月収の満足度	とてもよい	2		1		3
	ややよい	6	6	3	5	20
	どちらとも	2	3		5	10
	やや低い	3	7	1	1	12
	とても低い	2	3		1	6
1カ月の送金額	0	3	4		3	10
	200元未満	1	4	3	3	11
	200元～	8	7	2	5	22
	500元以上	3	4		1	8
1カ月の貯金額	0	2	5		1	8
	200未満	1	6		1	8
	200元～	3	6		7	16
	500元～	5	2	2	2	11
	1000元以上	4		3	1	8
貯金の用途 (複数回答)	①	11	3	3		17
	②	3	3		5	11
	③		2			2
	④				3	3
	⑤	11	8	4	4	27
	⑥	1	1		1	3
利便性の提供	農業機具	8	6	3	3	20
	シャワー	2	1	1		4
	カラーテレビ	7	10	3	3	23
	洗濯機	5	1	3	1	10
	冷蔵庫	4	1		4	9
	三輪車	6	7	1	1	15
	水道		2	1		3
	暖房機		1			1
	クーラー	2				2
	学習用具	3	1	1		5
	ガス	7	2	1		10
住居状況	会社の寮	4	11	1	10	26
	賃貸アパート	10	6	4	1	21
	親戚・友人の家	1	1		1	3
	自分で買った家		1			1
同居人数	1人		1			1
	2～4人	14	8	4	6	32
	5～8人	1	10	1	6	18

補注：貯金の用途：①子供・家族の学費、②老後の保障、③借金の返済、④農業機器の購入、⑤家の建改築、⑥息子・自分の結婚資金
資料）実態調査より作成。

家族がよい新年を迎えることができるようにと、貯金の一部を渡している。S 9 氏自身の毎月の生活費は 200 円ということになるが、会社の食堂で食べる食費が 50 円、タバコ銭が 30 円程度、時々同僚と一緒に酒を飲んで使うのが 30 円程度で、それ以外の支出は極力おさえている。少しでもお金が残れば貯金にまわし、妻子のために衣服を買ったり、老いた両親に渡すようにしているという。S 9 氏

は、「娯楽だって？そんなお金はないよ。故郷の妻子が首を長くして僕の送金を待っているからね。唯一の娯楽は、休日に同僚と一緒にお酒をちょっとだけ飲むことだ」と苦笑いを浮かべていた。

＊【S 1 氏・男・63 年生・送金額 500 元／貯金額 800 元】子供が結婚する時、新しい家を立てないといけない。大きい支出だから何年間か貯金しないといけない。

【S 32 氏・男・88 年生・送金額 500 元／貯金額 100 元】弟はまだ中学生だけど、もうすぐ高校に入る。高校に入ったら、学費が高くなる。両親の負担を軽くするために、自分が貯金して、弟の学費にあてる予定だ。もし弟が大学に入れば、もっとお金がかかると思う。その時、両親の収入だけでは支えられないかも。どうしても弟には大学に入ってほしい。この社会では、学歴が高い方が仕事を見つけやすいと思う。僕のように中学卒で技術もない人は、肉体労働ばかりやるしかない。それだと給料のアップはなかなか難しい。

【S 34 氏・男・90 年生・送金額 600 元／貯金なし】給料は少なく、生活必需品以外のための費用はない。僕が 10 歳の頃、母は病気で亡くなった。その後、父 1 人で僕を育ててくれた。実は高校へ行きたかったけど、行って大学に入っても、大学の学費を父 1 人では負担できない。それに、今は大学生でも仕事を見つけにくい。僕はよく考えて、やはり高校への進学をやめた。早めに社会に出て、仕事に従事して、経験を積むことが、僕にとって一番いい選択だと思う。出稼ぎに来たばかりで給料も低いけれど、月 600 元ぐらい父に送っている。父はそれを全部貯金していて、僕のために新しい家建ててくれるつもりだ。

【S 49 氏・女・86 年生・送金額？／貯金額 1,500 元】貯金の一部は両親へ送って弟の学費に使う。残りは自分で貯めて、結婚や将来の自分の生活のために使う。

【S 31 氏・男・86 年生・送金なし／貯金額 200 元】自分で自分の生活を維持できているので、両親の負担は軽くなった。給料は低く、送金できない。ちょっと貯金があれば、彼女にプレゼントを買ってあげたり、一緒に遊んだりして全部使う。残りは全然ない。もし彼女と結婚できたら、両親の負担は軽くなる。農村での結婚資金はとても高いから。自分で結婚相手を見つけられたら、そんなに大金はかからない。

【S 8 氏・男・75 年生・送金額 0／貯金額 1,850 元】妻は大卒で成績はずっと優秀だけど、末っ子なのでわがまま。同僚との関係がうまくいかどうか心配だ。夫婦でもっといい学校へ入って、勉強し続けたい。そのお金を貯めている。貯まったら、先に妻を勉強させて余裕があれば僕も勉強したい。

【留守家族への利便性の提供】

出稼ぎ者は貯金の中から、留守家族に様々な生活上の利便性を提供している。彼らは、村に残っている家族の負担を減らしたいという思いを起点にして、農村の生活に様々な物を提供することで、不断に農村の生活状況に影響を与えていると言える。

＊【S 6 氏・男・74 年生】以前は白黒テレビだったけど、いま、農村みんながカラーテレビに変わった。2004 年の旧正月に、うちもやっとカラーテレビを買った。

【S 9 氏・男・76 年生】農産物の収穫時は運搬が大変だ。以前の木の荷車では負担が大きいため、村にいる妻の負担を軽くするために三輪車を買ってあげた。

【S 14 氏・男・78 年生】故郷【山東省】では冬になるととても寒い。母は手にあかざれができて、洗濯する時に辛い思いをするので、去年洗濯機を買ってあげた。水道はまだ完全じゃないし、都市に比べれば不便だけど、家族はみんな喜んだ。

【住居状況と同居人数】

住居は、若い世代を中心に、会社の寮に住んでいる人が多かった。そのため、同居人数も多い場合が多かった。住居条件が悪くても、自分の後々の目的のために節約していること、および寮は治安的に安全・安心であることを考慮して、さほど不満を持っていないことがうかがえる。ただ、中には S 37 のように、「会社の寮は独身向けだ。夫婦向けの寮はない。家賃が高くて賃貸アパートに住むしかない」と、不満を漏らす者もいた。実際、年長の世代は賃貸アパートが多くなる。

＊【S 4 氏・男・71 年生・会社の寮／無料／4 人同居】北京の家賃は高い。少なくとも月 200 元はかかる。会社の寮は狭いけれど、費用の節約の方が大事。人数が多ければ寂しくない。

【S 41 氏・女・83 年生・会社の寮／家賃月 50 元／8 人同居】家賃が安いし、みんな一緒に住んでいるから怖くない。何かあったら互いに世話をする。

【S 43 氏・女・84 年生・会社の寮／家賃月 50 元／8 人同居】会社の寮は家賃が安いし、1 人で住むよりお金も節約できるし、にぎやかでいいじゃないか。

【S 50 氏・女・87 年生・会社の寮／無料／3 人同居】女の子は会社の寮だと安心だ。ひと部屋に 3～4 人ぐらいで住んで、安全な感じがある。

【S 46 氏・女・85 年生・会社の寮／家賃月 50 元／8 人同居】住居は一時的な休憩の場所にすぎないから、どこでもいいじゃないか。ここで何年間か我慢してお金を貯めて、故郷に新しい家建てて。その家は自分の家だ。その家のために、今はどんな住居でも構わない。

(c) 北京での差別と社会関係

北京での差別経験と社会関係については、表 6 の通りである。

【北京で差別された経験】

北京で差別された経験があると感じている者は半数以上だが、中でも若い世代の男性が多い。一方、若い世代の女性はほとんど差別を受けた経験がなかった。北京では、男性出稼ぎ者はよく 1 人で行動するため、女性出稼ぎ者よりも北京出身者との接触機会が多くなり、差別に直面する機会も増すのだと思われる。一方で女性は、「同じ出身地の友人と」一緒に行動するため、北京市民と接触する機会が少ないか、またはまったく接触しない。また、差別を受けたと答えた者のほとんどは、北京出身の労働者に差別されたことと述べている。具体的な差別の内容としては、農村出身者であることに対する差別が最も多かった。男性は、職場や地域で北京出身者に、貧しさや社会的地位・出身地等を理由にして差別されたことがあると感じている。北京市民から出稼ぎ者への差別感、および出稼ぎ者から北京市

民への劣等感や後ろめたさ、これら両者が相まった形で、北京における差別は成り立っている。

- * 【S 22 氏・男・84 年生・河北省出身】近くでは、何か悪いことがあったら農民出稼ぎ者がやったと言われる。もちろんその農民出稼ぎ者というのは、僕たちのような男性を指す。
- 【S 51 氏・女・87 年生・陝西省出身】一緒に働いている女性はみんな外地から来た人。職場に北京人は 1 人もいないし、あまり北京人と付き合わない。
- 【S 7 氏・男・75 年生・山東省出身】自分はよその出身だから北京出身者より地位が低い。だから差別されるのは仕方ない。
- 【S 11 氏・男・77 年生・山東省出身】我々は北京へ出稼ぎに来て、北京出身者の働き口を奪っているから、差別されても仕方ない。
- 【S 20 氏・男・83 年生・山西省出身】何か事件があると、すぐに外地人がやったと決めつける警察官も少なくない。
- 【S 21 氏・男・83 年生・山東省出身】市場で買い物をする時も注意しなければならない。商品をちょっと触っただけでも、外地人だという理由でむりやり買わされたりする。特に、値段が安いので有名な動物園の近くの市場では、外地人に対する扱いがひどい。

また、北京市に流入した出稼ぎ者の暫住証制度¹²に関わる差別もあった。暫住証制度に対する不満は多い。

- * 【S 8 氏・男・75 年生・山東省出身】2001 年 6 月のある日曜日、北京市内へ遊びに行った。帰途、バスを下りて会社の寮へ向かう途中、警官に呼び止められた。「お前、暫住証を持っているか」「暫住証は会社の寮に置いてきた」と何度も説明したが、警官は有無を言わず私を連行し、留置場に拘留した。留置場には 10 人位の農民出稼ぎ者が拘留されていた。お金（保釈料）があれば釈放されるが、30 元の手持ちしかなかったため、翌日、「流民」として出身地である山東省済南市に送還された。済南でも留置場に拘留されたが、家族に心配をかけたくなかったので、友人に連絡した。友人は 500 元の保釈金を支払い、ようやく私は解放された。
- 【S 16 氏・男・80 年生・黒龍江省出身】北京は首都だから、他の都市より管理が厳しい。特に国家レベルの重要な会議がある期間は、出稼ぎ者などの「外地人」に対する検査〔例：身分証明書の確認、農民出稼ぎ者の集中地での暫住証の検査〕が厳しくなる。私達は検査を恐れ、職場と寮以外には出歩かないようにしている。
- 【S 17 氏・男・80 年生・黒龍江省出身】2004 年から暫住証の制度は中止されたが、外地人に対する検査は続いている。

【社会関係の内容】

出稼ぎ農民をめぐる社会関係全体についてみても、やはり差別の問題が深く関わっている。調査対象者は、北京市で仕事をしていても「故郷にいた頃からの友人とか親戚とか家族だけ」のネットワークに限定する狭い人間関係しかもっていないことが分かる。「悩み相談の相手」にしても「手伝ってくれる人」にしても「話し合える人」

表6 北京での差別

性別		男性		女性		合計
年齢		26歳～	18～25歳	26歳～	18～25歳	
人数		15	19	5	12	51
差別	有	8	16	2	1	27
	無	7	3	3	11	24
差別する人	同職場の北京出身労働者	4	7	1	1	13
	その他北京出身者	2	6	1		9
	他の出稼ぎ者		2			2
	雇い主	2	1			3
差別の内容 (複数回答)	男女		1			1
	貧富	2	9	1		12
	社会的地位	2	6		1	9
	政治権力		1	1		2
	人脈の有無		3			3
	縁故関係					0
	団体人数多寡		1			1
	学歴		1		1	2
	出身地	6	6	2	1	15

資料：実態調査より作成。

にしても、「友達」の重要性が際立つが、友達の人数は少ない（「2 人以下」が多い）。そもそも、出稼ぎ者は北京市民と接触する機会が少ないが、その上、北京市民に差別されることに対する出稼ぎ者の警戒心、および（【S 25 氏】が言うには）北京市民が根強く有している「農民出稼ぎ者は無知無礼、落伍者、田舎くさい」というイメージが相まって、相互にあまり接触しないことの結果が現れていると言えるのではないか。

(d) 北京での生活

【生活面で困っていること】

出稼ぎ者が一番困っているのが経済的に苦しいという問題である。それ以外では、生活上の知識不足や、家族と離れて暮らしていることからくる寂しさ、住居条件への不満などが見られる。ただしそれでも、聞き取りの結果によれば、以前の農村での生活に比べれば彼らは満足しており、また、たとえ苦しくとも「いい未来」のため、後々の目的のために今の困難は苦にしないという意識もうかがえた。

- * 【S 42 氏・女・84 年生】一番困るのはお金だ。北京の物価は高く、生活は苦しい。けれど、以前の農村での生活よりはいい。
- 【S 20 氏・男・83 年生】都市へ出稼ぎに来たのは、遊びに来たわけではない。もちろん家族と離れて寂しいし、収入が低くて生活も苦しい。しかしどんなに辛くとも、お金を稼ぐためだから我慢できる。
- 【S 21 氏・男・83 年生】農村の生活スタイルと全然違って、北京で自分の知識不足を深く感じた。初めて北京に来た時、同じような建物ばかりで、帰り道もよく迷った。だんだん慣れてきたが、一人で北京市内へ行ったことはない。自分はまだ若いから、北京でいい未来を見つけた。
- 【S 30 氏・男・85 年生】出身地などによる差別はある。農民だから「汚い、田舎くさい、落後者」など思われる。差別さ

れても、家族のために気にかけない。

【生活面で楽しいこと】

北京での出稼ぎ生活は、辛く苦しいことばかりではない。「自分の視野が広がった」、「故郷に送金できる」、「新しい技術を学んだ」、「貯金がたまる」などの答えも多かった。聞き取りの内容も同様で、北京での生活におおむね満足していることが伝わってくる。

＊【S 8 氏・男・75 年生】北京で知識の範囲も広がって、新しい理想もできた。

【S 1 氏・男・63 年生】北京はやはり大都市だから、農村とは比較にならない。お金を貯めて、家族へ送金するのが目的だ。これが一番満足している点だ。

【S 29 氏・男・85 年生】農村では先が見えないから北京へ来た。今、給料は低いけど、北京の高いビルも見だし、立派な陸橋も見だし、天安門を見た。うれしい。

【S 39 氏・女・79 年生】北京での生活は苦しい事もあるけれど、農村の生活よりはいい。農村ではテレビで見えるものが、北京では実物が見られる。農業をしていると、耐えられないほど日焼けがひどい。今の仕事は工場で長時間働くけれど、日焼けの心配はない。

表7 北京での社会関係

性別			男性		女性		合計
年齢			26歳～	18～25歳	26歳～	18～25歳	
人数			15	19	5	12	51
悩み相談相手	関係	無		6		2	8
		友達	9	12	2	10	33
		兄弟姉妹	1				1
		配偶者	3		1		4
		親戚	1		1		2
		同僚	1		1		2
		同郷人		1			1
	人数	2人未満	13	7	4	4	28
		2～5人	2	4	1	3	10
		多い		2		3	5
手伝ってくれる人	関係	無	2	8		3	13
		友達	11	5	3	6	25
		兄弟姉妹	2	3	1	1	7
		親戚		1	1	1	3
		同僚				1	1
		隣人		1			1
		雇い主		1			1
	人数	2人未満	5	9	4	7	25
		2～5人	5	2	1	1	9
		多い	3			1	4
話し合える人	関係	無	2	8		2	12
		友達	11	11	5	6	33
		兄弟姉妹				2	2
		配偶者	2				2
		同僚				2	2
	人数	2人未満	9	10	5	7	31
		多い	4	1		3	8

資料）実態調査より作成。

表8 北京の生活で困る事・楽しい事（複数回答）

	性別	男性		女性		合計
	年齢	26歳～	18～25歳	26歳～	18～25歳	
困っている事	人数	15	19	5	12	51
	低収入・経済苦しい	10	11			21
	物価高・経済苦しい	8	15	3	5	31
	拝金主義が強い	2	1		1	4
	娯楽が少ない	1	2		1	4
	知識が少ない	10	6	4	6	26
	家族の病気・障害	2	3			5
	自分の健康・病気	2	2			4
	差別がある	1	3			4
	人脈がない	2	2			4
	生活リズム速すぎる	3				3
	友達・親戚との交際		1		1	2
	住居条件が悪い	6	4	1	6	17
	治安が悪い		1		2	3
	生活習慣・文化違う		3		3	6
	友達・仲間がいない	1	2			3
	家族と離れて寂しい		2			2
	将来の生活が不安	8	7	3	6	24
楽しい事	故郷に送金できる	9	12	2	3	26
	貯金がたまる	10	5	3	4	22
	便利な文化的生活		3	2	3	8
	自由な生活	3	7	3	2	15
	視野が広がった	9	10	2	9	30
	新しい技術を学んだ	4	7	2	9	22
	仕事内容おもしろい	2	3	1		6
	娯楽が多い	1	6		3	10
	男の子ができた	1	1			2

資料）実態調査より作成。

2-3. 出稼ぎを通じた意識変化

最後に、出稼ぎをとおして農民たちがどのように社会意識を変化させてきているのかをみよう。

(a) 人生観

まず、人生で重視することに関する意識の変化である。「経済的に豊かな生活をしたい」という意識が大幅に減少し、逆に「専門的な知識・技術を身につけたい」が増加している。調査対象者たちは、当初の目的である収入を得る過程で、それをいつまでも続けることはできないと自覚し、将来に備える価値観を身につけている。そして、将来に備えるための手段として、「専門的な知識・技術」を重視するという回答が増加しているのだと言えよう。

＊【S 28 氏・男・85 年生・中学校】北京へ出稼ぎに来る前は、お金が大事だと思っていた。その時、両親の収入では兄弟3人の学費を負担できなかったから、一番下の弟のために、2000年の春、僕と2番目の妹が北京へ出稼ぎに出た。最初、僕と妹は給料の3分の2を両親へ送金した。今、弟は大学に入って、奨学金ももらっている。北京では肉体労働ばかりやった。給料も安い。お金を貯めて、技術を勉強したい。特に、専門学校で資格が取得できる専門技術を学びたい。具体的に何を勉強するかはまだ決まってない。

【S 26氏・男・85年生・中学校】肉体労働は誰でもできる。若い時は力があるけれど、将来、歳をとったら、技術もないし、力もないし、仕事ができなくなると心配している。若いうちに、何か勉強しようかなと考えている。

【S 25氏・男・85年生・中学校】最初は、お金のために出稼ぎを始めた。出稼ぎ生活の経験を通して、単純な肉体労働ではお金がなかなか貯められないことが分かった。長い将来を考えると、目の前のお金より技術と専門知識がもっと大事だと思う。

【S 8氏・男・75年生・専門学校】知識が少なくて、学生の時にあまり勉強しなかったことをとても後悔している。今は何か勉強して自分の能力を向上させたい。

【S 19氏・男・83年生・中学校】知識・見聞は多ければ多いほどいい。北京のような大都市では、自分の能力と知識が足りなくて生きにくいと実感した。

【S 33氏・男・88年生・中学校】北京の生活経験を通して、以前の自分の考えはととても遅れており、無知だったと感じた。北京に来て視野も広がり、意識のレベルも高くなった。

【S 41氏・女・83年生・高校】人間がこの世に生きている目的はお金だけじゃない。一番大切なのは生きる意義だ。人間にとって健康が一番重要だ。家族の幸福のために何をやらいいのか考えなければならない。

また、【学歴】の項で見たように、26歳以上の男性の中には専門学校を卒業した者も相対的に多いが、彼らは出稼ぎ経験を通して専門技術の重要性に気づき、出稼ぎ先で働きながら専門学校に通ったのである。以下、それについての聞き取りの内容であるが、彼らが物心両面で自信をつけている様子がうかがえる。

表9 出稼ぎを通した人生観の変化

性別		男性		女性		合計
年齢		26歳～	18～25歳	26歳～	18～25歳	
人数		15	19	5	12	51
経済的に豊かな生活をしたい	前	9	11	2	6	28
	後	1	4		1	6
やりがいのある仕事につきたい	前	3	3	2	4	12
	後	3	4	2	1	10
故郷・両親を大切にしたい	前	4	12	3	4	23
	後	7	6	1	7	21
現在の家族を大切にしたい	前		1			1
	後	5	2	1	1	9
子供の将来を第一に考えてたい	前	4	1		1	6
	後	7	5	2		14
専門知識・技術を身に付けたい	前	2	2	1	2	7
	後	4	12	4	2	22
農業・農村の発展に貢献したい	前	1	1		1	3
	後	1				1
社会的な地位・名誉をえたい	前		2			2
	後				4	4
仲間との関係を大切にしたい	前	2		1	2	5
	後	1			1	2
無理をせず、堅実にいきたい	前	2	2	1	1	6
	後		3		2	5
他人との競争に勝ちたい	前	2				2
	後		1		1	2

資料) 実態調査より作成

* 【S 6氏・男・74年生・専門学校】最初は、お金のために出稼ぎを始めた。その時は、建築現場の運搬工だった。毎日、死に物狂いで働いても、給料は一番低かった。下塗りできる人の方が仕事は楽だし、給料も僕より高かった。だから、僕は知り合いの紹介で、下塗りを教えてもらった。その技術を身に付けたことで、仕事内容も給料も改善された。その後、僕は窓・ドア・水道・電気などを取り付ける技術も仕事の中で学んだ。また、近くの専門学校に室内装飾のクラスがあった。僕は夜の時間を利用して、室内装飾の基本知識と技術も全部身に付けた。今は、僕は単純な肉体労働からリーダーになった。収入も前の4倍になった。

【S 11氏・男・77年生・専門学校】出稼ぎを始める前は、あまり勉強しなかった。出稼ぎを始めてから、知識の重要性が分かった。僕は中学校に入ったことがなくて、難しい専門知識は学べないから、運転手養成の専門学校を選んだ。仕事の休みの時間を利用して頑張った。今は、運転手の仕事を見つけた。給料はそんなに高くないけれど、好きな仕事だ。車の修理にも興味がある。今、僕は運転も修理も両方できる。仕事以外でたまに友達に修理を頼まれて、いくらかの報酬ももらえる。収入も高くなった。

【S 9氏・男・76年生・専門学校】僕は最初、料理店で案内スタッフの仕事をした。その時、コックが羨ましかった。けれど、コック養成の専門学校は学費が高かったから、すぐには勉強できなかった。出稼ぎを始めてから3年目に、僕の貯金と両親の援助と友達から借りた金を合わせて、コック養成の専門学校に入った。今は2年目だ。まだ卒業していないけど、コックの助手として料理店で仕事をしている。将来、卒業したら、コックの仕事につける自信がある。

【S 23氏・男・85年生・専門学校】出稼ぎに来て、肉体労働だけで貯金をするのは、結構難しいと思う。それに僕は、ずっと運転手になりたかった。小さい頃から車に強い興味があった。今は自分の車を買えないから、運転手になって、毎日車を運転できるのは楽しい。出稼ぎを始めてから2年後に、自分で運転手養成の専門学校の学費を貯めると、すぐその学校に入った。今は、運転手になる夢が実現した。

さらに、家族や子供を大事に思う意識も伸びを見せている。これは、ここまで見てきた聞き取り内容で、子供の将来を思う声が多かったことにも表れているだろう。逆に、出稼ぎ前後であまり変化せず、一貫して強いのは、「故郷や両親を大切に思う気持ち」である。

* 【S 3氏・男・71年生・高校】どこへ行っても自分の家じゃないと感じる。やはり故郷が一番親切だ。外に長くいればいるほど故郷が懐かしくなる。

【S 34氏・男・90年生・中学校】自分の学歴では、北京に定住するのは不可能だと思う。やはり技術を勉強して、故郷に帰るのがいい。それに、父親1人では寂しいと思うので、父親と一緒に生活したい。

【S 23氏・男・84年生・専門学校】いま、農村の発展も早い。単純な肉体労働だけではない。機械化もだんだん発展して行く。北京の仕事より農村での生活と仕事の方が自由だし、ス

トレスも少ない。

【S 15 氏・男・79 年生・中学校】農村の自然環境はいいし、空気もきれいだし、人間関係もそんなに複雑ではないと思う。北京での生活はしんどいからいつか帰る。

(b) 結婚・離婚観

では次に、結婚・離婚に関する社会意識とその変化をみよう。

【結婚観】

結婚相手において重視する要素として、「やさしさ」や「愛情」といった感情面は大きな意味をもち、これは出稼ぎを経ても大きな変化はみられない。また「経済力」も変わらず重視されている。一方、上記の「専門的な知識・技術の重視」とも関係すると思われるが、相手の能力を重視する人が、出稼ぎ生活の体験をふまえて増えている。北京という大都市で今後も生活していくことを前提に、将来的な成功を目指すため、パートナーに必須の要素として、能力が重視されていると言える。性別・年齢別に見てみると、結婚相手に求めるものでは、年長の男性では出稼ぎ前には「優しさ」が多かったが、出稼ぎを始めてからは、より多様な要素に分散している。これに対し年少の男性は、出稼ぎ前は「経済力」や「優しさ」を求めているが、出稼ぎ後は「優しさ」に加えて「能力」を求める人が増えている。そして女性は、出稼ぎ前から結婚相手に「能力」を求めているが、出稼ぎを通してますますその傾向を顕著にしている。それに「北京戸籍」も結婚相手の条件に加えられている。北京戸籍を重視しているのは女性の方が多く、そこには男性より女性の方が北京戸籍を持っている人と結婚できる可能性が高いという現実がある。

* 【S 40 氏・女・83 年生】出稼ぎ前、何回も見合いをした。相手はすべて、学歴や家族勢力や家族の経済力を中心に選んだ。能力になんか全然関心がなかった。北京に来てもう2年が過ぎたけれど、将来も北京で生きていきたい。両親と同じような農村生活を送りたくない。そのためには私1人の力では無理だから、結婚相手の協力が必要だ。もし結婚相手に能力がなかったら、この夢は実現しにくい。お金がなくても、学歴が高くなくても、一定の社交能力・技術的な能力・生活適応能力が大事だと思うようになった。

【S 45 氏・女・85 年生】学歴がなくても能力があったら、この社会でいい将来を築ける。例えば、友達の夫は小卒だけれど、社交能力がすごい。色んな友達がいて、出稼ぎに来た3年目から友達と一緒に果物の卸売会社を作った。奥さんと子供も北京に連れてきて、村の両親に新しい部屋を建ててあげた。私もそんな人と結婚できたら運がいいと思う。

また、結婚相手の条件として北京戸籍を重視する人も若干増えている。現在、中国では戸籍制度が弱体化しつつあるが、それでもなお戸籍制限は厳しい。特に北京において最も優遇される北京戸籍を取得するには、北京戸籍保有者との結婚が唯一の方法である。以下のような、ある意味では身も蓋もない言い方の中に、北京で生活していくにあたっての北京戸籍の重要性を確認することができる。

* 【S 39 氏・女・79 年生】北京に来ないと戸籍の重要性は分からない。北京にずっと住みたいのなら、北京人と結婚するのが直接的な方法だ。北京は家賃が高いから、北京人以外の人

表 10 結婚観・離婚観の変化

性別			男性		女性		合計
年齢		26歳～	18～25歳	26歳～	18～25歳		
人数			15	19	5	12	51
結婚観の変化	経済力	前	2	8		2	12
		後	5	3	1	3	12
	高学歴	前	3	2	2	2	9
		後	4	4		4	12
	家族勢力	前		2	2	1	5
		後	1	3		2	6
	能力	前	5	4	3	6	18
		後	5	12	4	9	30
	やさしさ	前	13	7		3	23
		後	7	10	1	1	19
	格好よさ	前	1	2	1	3	7
		後	3	2			5
	愛	前	3	6	1	5	15
		後	3	5	1	5	14
	北京戸籍	前			1		1
		後	1		3	3	7
年齢	前		5	1	1	7	
	後	1	2	1	1	5	
離婚観の変化	①	前	4	8	4	5	21
		後	2	3			5
	②	前	7	8	2	2	19
		後	4	4	1		9
	③	前	7	3	3	6	19
		後	3	2		1	6
	④	前		1		3	4
		後		4		2	6
	⑤	前	2	1		2	5
		後	5	5	3	6	19
	⑥	前					0
		後	4	1		1	6
	⑦	前		2			2

補注：離婚観の変化

- ① 女が一度結婚したら、絶対に離婚してはならない。
② たとえ夫婦の関係が悪くなくても、できるだけ我慢して関係を修復すべきである。
③ たとえ夫婦の関係が悪くなくても、子供がいる以上、子供のことを考えて離婚すべきではない。
④ 夫婦の関係が悪くなったら、離婚することもやむをえない。
⑤ 夫婦の関係が悪くなったら、はっきり離婚すべきであり、不幸な結婚生活を続けることはお互いにとってよくない。
⑥ 現在の配偶者よりも好きな異性ができれば、離婚することもやむをえない。
⑦ 結婚や離婚の制度に縛られず、自由に生きる方がよい。

資料) 実態調査より作成。

と結婚したら、部屋を買うことは言うまでもなく、借りても家賃が払えない。逆に北京人だったら、能力やお金がなくても、最低限自分の部屋を持っている。

【S 50 氏・女・87 年生】友達の1人が北京戸籍を持っている人と結婚して、みんな喜んだ。その北京人は、元々は北京周辺の農村出身者だった。優秀な人じゃないけれど、北京人だから、一生北京に残れる。

ただ、次のような女性の話も聞かれた。ここには、前記の【差別経験】の項で見たような、北京人から非北京出身者への差別心や、非北京出身者の後ろめたさも絡まりあった、理想と現実のギャップが見てとれる。

＊【S 37 氏・女・77 年生】私はもう結婚しているから、相手の条件について話しても遅いけれど（笑）、周りにいる未婚の女の子によく言うように、結婚相手を選ぶ時、今の経済状況が悪くても、能力と性格の方がもっと重要だ。北京戸籍があったらなおいい。もちろん能力があって性格もいい北京人が私のような出稼ぎの女性と結婚する可能性は、ゼロに近いけれど。

【S 47 氏・女・85 年生】結婚したいけれど、相手がいない。私の友達は北京人と結婚した。子どもが生まれて3歳になると、子どもと奥さんも北京の戸籍をもらえる。私はまだ25歳で若いから、何年間か待ってみる。もし同じ農民出稼ぎ者と結婚したら、生活が辛い。それくらいなら結婚しない方がいい。

【離婚観】

一方、離婚観には大きな変化が見られる。調査対象者たちは、出稼ぎを経験する前は離婚することに否定的な意見をもっていたが、出稼ぎを通して、事情によっては離婚もやむをえない、または必要であるという意見が変わってきた。こうした変化は、出稼ぎ者全体でみられる。ただし、そうした意見の変化が特に顕著なのは女性である。これに比べれば、男性の農民出稼ぎ者には、依然として離婚に否定的な意見が根強く残っている。総じて、伝統的な婚姻観念から、個人的な自由を重視する意識へと変化していることが分かる。結婚観の変化にも見られたが、自分が望む関係を獲得しようとする手段的・機能的な意識の表れともとれるだろう。聞き取りでも、そのような声が多く聞かれた。

＊【S 2 氏・男・66 年生・既婚】以前、離婚は恥ずかしいことだと思っていたけれど、最近、離婚した知り合いや周りの人が少なくない。もう恥ずかしいことではないと思う。

【S 19 氏・男・83 年生・未婚】僕はまだ結婚していないから、離婚とか当然考えたことはない。けれど、1つ分かっているのは、もし2人で一緒に生活して苦しくなったら、絶対離婚するだろうということだ。

【S 38 氏・女・78 年生・既婚】結婚・離婚は個人の自由だ。2人でいて幸せなら結婚、幸せでなくなれば離婚。私は、両親のように愛情のない婚姻関係を一生続けるという代価を払うことはできない。

【S 3・男・71 年生・既婚】僕はもう1回離婚したことがある。今は再婚した。以前の妻とは性格が合わなくて、よく喧嘩した。息子が3ヶ月の時、離婚した。僕もほっとした。毎日喧嘩していた生活を思い出すと頭が痛くなる。

(c) 子どもの将来への期待

子どもの将来への期待についてみよう。

【学歴期待】

子どもへの学歴期待は、出稼ぎの前後であまり変化はない。多く

表 11 子供の将来の学歴・居住地への期待

性別			男性		女性		合計
年齢			26歳～	18～25歳	26歳～	18～25歳	
人数			15	19	5	12	51
子供の将来学歴への期待	中学校	前		1			1
		後					0
	高校	前	1	1		2	4
		後		1			1
	大学	前	14	14	5	9	42
		後	13	11	4	10	38
	専門学校	前					0
		後	2	2	1	1	6
	海外留学	前		1			1
		後		2			2
	任せ	前					0
		後		1			1
	無回答	前		2		1	3
		後		2		1	3
子供の将来居住地への期待	故郷農村	前		2			2
		後					0
	同じ省の地方都市	前	3	4	2		9
		後	1	1			2
	同じ省の省都	前		1		1	2
		後		2			2
	北京などの大都市	前	7	8	3	9	27
		後	8	10	5	10	33
	海外	前	1				1
		後	2	1			3
	任せ	前	4	2		1	7
		後	4	3		1	8
	無回答	前		2		1	3
		後		2		1	3

資料) 実態調査より作成。

の出稼ぎ者は、出稼ぎの前後を問わず、自分の子どもには大学までの進学を望んでいる。ただ、専門学校の卒業を期待する者の増加も見られ、これも、上記の「専門知識・技術の重視」と関係していると思われる。大学卒という学歴に期待しつつも、仕事を得るためにはその学歴が今や通用しなくなりつつあるという現実を目の当たりにした経験が、子供たちへの学歴期待に反映されていると言える。聞き取りによると、以下のような声が聞かれた。

＊【S 2 氏・男・66 年生・小学校】大学はまだ多くの人の夢。もちろん、僕は子供に将来いい大学に入ってもらいたい。もしいい大学に入れない場合は、いい専門学校でも構わない。技術はメシの種だと思うから。

【S 14 氏・男・78 年生・専門学校】今の中国は10年前と全然違う。10年前、大学生は珍しかった。仕事も見つけやすかった。今は逆だ。大学生が私たちと一緒に面接を受けるケースも珍しくない。大学を卒業しても仕事を見つけられない。けれど、専門学校は違う。1つの専門技術を身につけたら、仕事が見つかりやすい。

【居住地期待】

また多くの出稼ぎ者は、出稼ぎの前後を問わず、自分の子どもには将来、農村ではなく、北京など大都市に住んでほしいと考えている。現在の出稼ぎ者にはもはや、伝統的な「子継父業¹³⁾」といった観念は存在しない。

＊【S 2氏・男・66年生】どうしても、子供は農村に戻させたくない。北京などに住んでほしい。農村では発展のチャンスはほとんどない。

【S 7氏・男・75年生】僕がずっと北京に住むのは無理だと思うが、子供は違う。子供は2歳から北京に来了。今は5歳で、北京の幼稚園に入った。将来は、北京で小学校、中学校に進学する。戸籍制度制限のため、高校時、農村に戻らないといけないと思うけれど…やはり、北京に住んでほしい。

(d) 本人の将来について

出稼ぎ者本人は、自らの将来をどのように考えているのだろうか。

【希望職業】

次に見る【希望居住地】とも関係するが、いずれは故郷に帰ることを想定している者が多いものの、農業をするという意識は薄い。また、現在の自分の雇用者としての労働条件の厳しさを反映してか、あるいは自分が身に付けた技術・知識を活用したいという意識が芽生えているのか、自営業を希望する意識が強い。

＊【S 4氏・男・71年生】一所懸命にお金を儲けて、家建て、子供が大学を卒業するころには、僕も歳をとるから、その時に故郷に帰る。他人の会社で働く事は飽きたので、帰ったら、自分で何かを営業したい。

【S 9氏・男・76年生】北京は様々な面で便利を提供してくれる。僕はPCに興味を持っているけれど、PCはますます重要になると思うから、PCの学習教育を自営業でやりたい。

【S 34氏・男・90年生】今の仕事は大変なので、もっと楽な仕事に就きたい。出稼ぎ前、PCの勉強をしたけれど、今の仕事ではPCを全然使わない。機会があれば、PCを使う仕事をしたい。将来、条件があれば、故郷へ帰ってPC修理の会社を作りたい。

【希望居住地】

最後に、自分自身の将来の居住地については、どうだろう。出稼ぎ前には6割以上が「故郷に帰るつもり」で、約4割が「もともと故郷に戻らないつもり」だった。しかし出稼ぎ後には「北京にずっと住みたい」ケースと「故郷に帰りたい」ケースがそれぞれ約5割で拮抗している。総じて「北京にずっと住みたい」人がやや増加したと言えるが、しかし、「出稼ぎを通して、逆に故郷に戻りたくなった」というケースもある以上、北京という大都市での生活は、出稼ぎ者の中に複雑な葛藤を産み落としていると言える。このことは、出稼ぎ者が北京での生活の中で、様々な困難に直面していることをうかがわせる。出稼ぎに来ているのに仕事がない者、収入が少なく、将来的に仕事を得ることができる見込みも少ない者、定住の前提としての家を買えない者、北京での生活や仕事にストレスを感じている者など、様々な困難を抱えた人がいる。そういった事情を経験することで、北京に残りたいという意識があったとしても、現実的に

表 12 自分の将来の仕事・居住地への期待

性別		男性		女性		合計
年齢		26歳～	18～25歳	26歳～	18～25歳	
人数		15	19	5	12	51
仕事	専門技術		1		1	2
	建築業		1			1
	サービス業		1			1
	製造業					0
	運輸業					0
	自営業	12	10	4	3	29
	農業	1				1
	公務員	1				1
	なんでもいい	1	6	1	8	16
居住地	①	2	3	1	3	9
	②	5	10		1	16
	③	5	2	3	6	16
	④	3	4	1	2	10

補注：①もともと故郷には戻らないつもりで北京に出てきたので、北京にずっと住む。

②ももとは故郷に帰るつもりだったが、気が変わり、ずっと北京に住む。

③ももともと故郷に戻るつもりだったので、いつか故郷に帰る。

④ももともと故郷には戻らないつもりだったが、気が変わり、いつか故郷に帰りたくなった。

資料) 実態調査より作成。

は故郷に戻らざるをえないという葛藤を含む認識がある。それは、様々な聞き取り内容からも分かる。

＊【S 1氏・男・63年生】いつ帰るかまだ考えていないが、結局、帰ると思う。北京は仕事場であって、仕事ができないなら北京にいる意味はない。帰るしかない。

【S 2氏・男・66年生】もし北京にずっと住む能力があったら、もちろん北京にずっと住むけれど、その可能性はないと思う。今の収入ではぎりぎり、もし歳をとって収入がなかったら、北京では生きていけない。故郷に戻るしかない。

【S 5氏・男・71年生】農村から出稼ぎに来たばかりの時、北京のきれいな夜景を見て、将来もこの都市から離れたくないと思った。もう北京に来て5年経ったけれど、なかなかその夢は遠いと感じた。北京はきれいだけれど、お金持ちの都市だ。僕のような出稼ぎ農民とは無縁だ。

【S 14氏・男・78年生】北京のような大都市にのみ、多くのチャンスがある。けれど、やはり外人だと感じるので故郷へ帰りたい。十分な貯金があれば、早ければ子供の教育費だけでも貯めたら帰る。

【S 32氏・男・88年生】お金を十分に儲けた時、最低でも結婚資金とその後の生活費ができた時、故郷に帰る。誰でも北京に住みたいけれど、誰でも住めるわけではない。

【S 41氏・女・83年生】一生懸命に働いても、北京では値段が高すぎて自分の家を買えない。自分の家は農村だ。そこに自分のすべてがある。いつか、お金が十分に貯まったと感じたら、自分の家に帰る。

【S 46氏・女・85年生】いま、農村の条件もだんだん改善されているし、経済も発展している。特に、故郷での生活は北

京より自由だと感じる。北京ではずっと外人だと感じる。戸籍もないし、やはり帰る。

総括

本論の目的は、都市へ流入した農民出稼ぎ者たちがどのような問題を抱えているのか、どのような生活を送っているのか、都市での生活体験を通してどのような意識変化を起こしているのかなど、農民出稼ぎ者の生活・意識実態を解明し、その社会的意義を考察することにある。以下、簡単に総括しよう。

まず、彼・彼女たちの移動の動機は、「流入地と流出地の収入格差」(馮)のみでは十分に説明しえない。つまり彼／彼女らは、確かに当初は「稼ぐ」ことを重視して出稼ぎを開始するが、しかし出稼ぎの体験を通して徐々に、「自分の視野を広げ」たり、「新しい技術の習得」といった新たな目標・動機を形成し、それによって出稼ぎを継続・再生産しているのである。特に若年層の出稼ぎにおいて、その傾向は顕著である。そしてまたそのような将来に向けた志向があるからこそ、彼・彼女らはたとえ出稼ぎ先の当面の生活や仕事、人間関係などで苦しいことがあっても、あまり苦しめないという傾向がみてとれた(また、農村に比べればまだという感覚も、それに付け加わる)。こうした諸事実に基づき、彼・彼女らの出稼ぎ生活に関する満足度は、出稼ぎを始めてからの期間、勤める会社の規模、子供にかかる費用、生活のレベルなどの多様な要因に規定され、したがって当面の収入の多寡とは必ずしも単純に相関していない。すなわち出稼ぎ者たちは、単純に「収入が多いから満足／少ないから不満」といった、現在志向的な感覚だけをもっているのではないのである。

また出稼ぎ者たちの中には、頻繁に雇用・解雇を余儀なくされたり、表向きは標準的な労働時間数でも実際には多くのサービス残業をこなしているなど、困難を抱えた者もいる。ただし彼・彼女たちの側にもまた、収入や職場環境を考慮して、自分にとって少しでも都合の良い出稼ぎ先に移っていきこうというドライでしたたかな意識が見られる。また、何か専門技術を持っていない限り、希望する仕事が見つかりにくいという現実を知ること、技術や知識を身につけようという意識の変化も起こしている。すなわち、当初の目的の1つである当面の出稼ぎ収入を得る過程で、さらに長期的な将来に備える価値観を身につけているのである。その意味で、彼・彼女たちは、「“3K”労働を担う重宝な限界労働力」(熊谷)であるばかりではなく、経験を積んで実際に専門技術を身につけ、現状の労働条件の厳しさを認識し、自分が身に付けた技術・知識を活用して自営業などの起業を考えるなど、新たな展望を模索する主体にはかならないのである。

しかもその主体性は、個人というより、インフォーマルな集団によって支えられている。出稼ぎ者が都市へ出稼ぎに出て仕事を見つける際、公的機関ではなく私的ネットワークが大きな役割を果たしていた。また北京で生活するにあたって親身になってくれる相手としても、友達という私的ネットワークの重要性が際立っていた。ただし、このことは反面で、出稼ぎ者の側の北京市民への劣等感、および北京市民に差別されることに対する警戒心の表れでもある。このことは、北京に住み続けたいとは思ってもどうしても馴染めない、

という感覚の一部を構成していると言えよう。そのような状況の中でも北京に定着するための1つの手段として北京戸籍の取得がある。「北京戸籍を獲得するために北京出身者と結婚する」という身も蓋もない言い方や、将来的な成功を目指すために結婚相手に「能力」を求めるという考えには、自分が望む関係を獲得しようとする(そうでなければ別れる)、出稼ぎ者の現実的・手段的な意識が端的に表れているだろう。また、そもそもこういった結婚観には、伝統的な結婚観から個人的な自由を重視する意識への変化が前提にある。しかし同時にそれは決して明るい色彩を帯びた自由ではなく、農民出稼ぎ者という不安定な立場にることによって結婚相手として敬遠されたり、北京に残りたいという意識があっても、経済面や環境面を考えた場合、後々故郷に戻らざるをえないことが予想されるなど、深い葛藤や諦観に陥取りされた自由である。

そうした中で、子供という存在およびその教育は、出稼ぎ者にとって、一つの大きな希望である。これは、出稼ぎ者の中に、早い段階で学業を断念せざるをえなかった経験をもつ者が少なくないことも、影響している。ただしそこでもまた、北京での高額な学費が大きな懸念となっている。また、子供に大卒という学歴を期待しつつも、実際にはすでにそうした学歴の価値が就職において低下しつつあることをも、彼・彼女らはすでに知っている。また自らが仕事を見つける際に苦労した経験もふまえ、単に学歴だけがあっても通用しないことを子供たちにも伝えたいといった意識も芽生えている。そして自分の子供には将来、北京など大都市に住んでほしいと考えているが、かといって彼・彼女らは、故郷を軽視しているわけではない。そもそも彼・彼女らは、故郷に残っている家族の負担を減らしたいという思いから出稼ぎをしており、農村の生活に様々な物を提供することで、不断に農村の生活状況に影響を与えている。その意識は、脱農村・都市化へと一方的に向かっているわけではない。しかしそれでも、現在および今後の中国社会の中でチャンスを得るためには大都市の方が圧倒的に有利であることは否めず、それもまた出稼ぎを通して彼・彼女らが学んだことの1つである。そこで特に子供を持った年長者たちは、自分たちの世代はともかく、産まれた時から北京にいることになる次世代には、北京在住への期待・願いを一層強めている。

馮(2009)は、高い教育レベルを持ち、滞在期間が長く、「夫婦と子供」で出稼ぎにきている人ほど、より強い定住意識を示すこと、収入ではなく職種が定住意識に影響を及ぼしていること、そして農業戸籍所有者の定住意識は低いことなどが明らかにした。確かにそうした傾向はあるだろう。しかし、実際には、高い教育レベルをもち、安定した職種で都市戸籍をもつ出稼ぎ農民は、全体の中ではごくわずかである。またそうした人も含め、多くの人々は、「定住か、それとも帰郷か」といった二者択一を、何らかの個別の理由・条件だけに基づいて行っているわけではない。一人ひとりの中に、定住を望みつつ、帰郷の展望をも模索する複雑な営みがみられるのである。定住を志しても差別され、疎外感を持たざるを得ず、住宅の購入や子供の学費など深刻な不安が立ちはだかることとなる。かといって帰郷を決断しようとしても、決して安定した生活は展望しえず、子供の将来も含めて考えれば、なおさらさらなる模索を続けざるを得ない。

こうした現実をふまえれば、大切なことは、彼・彼女らが北京に

定住するか、それとも故郷に戻るかという二者択一ではない。北京に定住した人々が彼・彼女らを差別・排除する北京の社会にいかに関与し、変えていくのか。また故郷に回流した人々が、北京での生活体験を生かして、故郷の社会をいかに変えていくのか、である。今後、こうした諸点をさらに深く研究することを、本稿の残された課題としたい。

- ¹ 「民工」とは、農民出身の労働者あるいは農民の身分を残したままで都市に出稼ぎにきた労働者の略称であり、「潮」とは巨大なうねりを意味する（加藤、1997：78）。
- ² 工業調整は1961年～1965年の期間に起こり、政府が都市人口を減らし、農業生産を強化した。また工業停滞は1966年～1977年の文化大革命期に起こり、知識青年が都市から農村へ移動して、農業活動に献身した。
- ³ 学生や幹部などが農山村に長期間定住し、思想改造を図るとともに、農山村の社会主義建設に協力すること。
- ⁴ 2001年5月26日、中国政府は農民の移動を促進するため、2001年10月から2万余の小都市で戸籍制度改革が進行した。原則として「小城镇の戸籍管理制度の改革推進に関する意見」の中で①安定した住所、②合法的職業について収入あり、③同居する直系親族がいるという三条件を満たせば、本人の希望で農村戸籍を都市戸籍に変更、取得できるとした。
- ⁵ 女性の中では数少ない年長者も、中学までが多い。彼女達の学齢期において、中国、特に農村では男尊女卑の観念が強く、「女の子を学校にやるのは無駄」、「女の子は将来、他家に嫁ぐので家族ではない」、「嫁いだ娘は撒いた水のようなもの」などと見なされ、全体的には未就学者が多かった。
- ⁶ 中国では零細な農家が多く、『中国農家耕地調査』（1996）によれば、一人あたり3畝（約20アール）以上の耕地を保有する農家は、全体の30.6%である。
- ⁷ マンションやビルのガードマン、清掃係、住み込みの家政婦、商店や新聞スタンドの販売員、レストランのウェイターやウェイトレス、自転車による宅配人、野菜売りなどを含んでいる。
- ⁸ 中国では現在、公的な職業斡旋システムが整備されつつあるが、農民出稼ぎ者を含む多くの低賃金労働者に対する公的な職業斡旋体制はまだ未整備で、職業斡旋を管理する制度は総じて混乱した状況が続いていると言える。これも賃金不払いなどの問題を引き起こす原因になっていると言える。
- ⁹ 『中国人口と労働問題報告 NO.7』（2006：52-3）によると、2004年の時点で、農民出稼ぎ者全体の6.1%が賃金不払いを経験している。賃金不払いの原因は様々である。例えば多くの企業では、毎月20～30%の賃金を保証金として差し引き、3年間の雇用期間中に何の失敗もなければ返却するという制度をとっている。もし1度でも何らかの失敗をすれば、保証金は返還されない。一般的には、保証金が農民出稼ぎ者の手元に渡ることは少ないと言われている。賃金不払いなどのトラブルが起こった場合、出稼ぎ者を保護する法律は未整備で、農民出稼ぎ者は保護を得られにくい。
- ¹⁰ 『中国人口と労働問題報告 NO.7』（2006：53）によると、農民

出稼ぎ者全体の79.3%が企業と正式な雇用契約を交わしておらず、臨時雇用の形態である。総じて農民出稼ぎ者は、雇用において極めて不利な地位にある。

- ¹¹ 『中国人口と労働問題報告 NO.7』（2006：53）によると、農民出稼ぎ者全体の平均労働時間は、2004年では週に6.3日、1日9.7時間。ただ、毎日12時間働き、週に休日なしという者も少なくない。
- ¹² 暫住証制度とは、中国において農村戸籍の者が都市部に居住する際に、都市部の行政単位（北京市など）から臨時の戸籍が交付される制度のことである。この戸籍を「暫住証」という。
- ¹³ 父の職業、ここでは農業を子どもが継承すること。

引用・参考文献

- 石田浩（2002）『中国内陸農村の貧困構造と労働力移動』、研究双書第129冊
- 大島一二（1996）『中国の出稼ぎ労働者—農村労働力流動の現状とゆくえ』、芦書房
- 温銳・悠海華（2001）『労働力の流動と農村社会経済変遷』、中国社会科学出版社
- 熊谷苑子・榊湯俊子・松戸庸子・田嶋淳子編著（2002）『離土離郷—中国沿海部農村の出稼ぎ女性』、南窓社
- 朱農（2005）『中国労働力と三農問題』、武漢大学出版社
- 鐘水映（2000）『人口流動と社会経済発展』、武漢大学出版社
- 石曉紅（2003）「中国における農民出稼ぎ労働の社会・経済背景と出稼ぎ労働書の構造的特徴」、『現社会文化研究』28号、新潟大学大学院現代社会文化研究科
- 南亮進・牧野文雄編著（1999）『流れ行く大河 中国農村労働の移動』、日本評論社
- 馮文猛（2009）『中国の人口移動と社会的現実』、東信堂
- 楊世英（2007）『中国経済—経済成長と労働力移動』、新青出版
- 李強（2003）「影響中国城鄉流動人口的推力与拉力因素分析」、中国社会科学雑誌者編『中国社会科学』1月号
- 若林敬子（2005）『中国の人口問題と社会的現実』、ミネルヴァ書房
- ルイス・アーサー（1969）『世界経済論』石崎昭彦・森恒夫・馬場宏二訳、新評論